

技術高校のリン！

第三のケモナー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

28世紀の『技術高校』に通う時田 輪。彼女には秘密があり…？
とても平穏とは言えない高校生活を送りながら、リンの周りには奇妙な事件、現象、謎、そして戦闘を通し『成長』と『進化』していく物語である！

目次

第1話：リン！	1
第2話：初戦闘！	6
第3話：初戦闘後！	11

第1話：リン！

ある研究所の地下深く、人間大のカプセルが7つ…。それを見上げるかのように一人の研究者が狂喜に満ちた声で叫んでいる。

「やっと…やっとだあ！7つ揃った！」

7つのカプセルの中にはそれぞれ別の人間が入っている。

「これで私はこの国の…いや、世界の支配者になれるんだあ!!？」

そしてそのカプセルに付けられたラベルにはそれぞれこう書かれていた。

『a l』『d l』『v e』『d n』『h n』『a i l』『蟹才驪？逾』と……。

「っ!?!」

目が覚めるとそこは俺の部屋だった。何やら恐ろしい夢を見た気がするが思い出せない。俺は寝汗をびっしょりかいていた。

(シャワーでも浴びるか……)

そう思い着替えを持って浴室へと向かう。鏡の前に立ち、『15年』見慣れた姿に向き合った。

西暦2797年…人類は衰退することなく、新たな『技術』を持って生存している。『技術』とは21世紀の言葉を借りると『超能力』、『異能力』、『固有技』などことである。その『技術』はあらゆる面での進歩をもたらし、生活水準も大幅に向上した。

そしてその『技術』が発現したのは西暦2402年、『第4次世界大戦』。第3次の時には使用されなかった兵器が第4次の時に使われてしまった。その影響により、皮肉にも『技術』は発現し戦争は落ち着いた。

そして現代……西暦2797年3月

俺…いや私は『技術高校生』の時田 輪。 正確にはまだ中学生で入

学はしていないが、4月からは女子高校生だ。

『技術高校』とはその名の通り『技術』を学ぶ、あるいは実戦使用許可ありの学校である。ここでは基礎を学び、将来役立つ知識を身につけ、社会に生かすというものがこの学校の目的だ。

「輪〜！そろそろ時間なんじゃないの？」

浴室の外から母親の声が聞こえる。近くのデジタル時計を見ると確かにもうすぐ家を出なければいけない時間だった。急いで支度をして玄関に向かう。そこには母親の姿があった。

「ほら、早くしないと座るところ無くなっちゃうわよ」

「わかってるよ母さん。じゃあ行ってくるね」

「気をつけて行ってきなさい。あーそうだ！私の『技術』で送ってあげようか？」

「いや母さんが行ったら、大騒ぎになるからいいよ別に。歩いても間に合うし……」

そう言つて靴を履いて外に出ようとする。すると母親が私を呼び止めてきた。

「待つて輪！これ持っていきなさい」

そう言々と母親は鞆を手渡してきた。中を確認すると弁当箱が入っていた。

「今日はいくらも美味しくできなかつたけど……」

「ありがとうございます。行ってきます」

そう言い残して外へ出る。

今から向かう所は、電子図書館という施設だ。そこでは電子上の様々な情報を得ることができ、勉強したり調べものをする場所でもある。早く行かないと閲覧用の端末がある席が無くなってしまう。

（あと10分くらいかな？）

時刻を確認しながら歩く。少し早めに出たため余裕はあるはずだ。しばらく歩いていると大きな建物が見えてくる。あれこそが私が通っている『電子図書館』だ。

建物の前まで来て周りを見渡す。既に何人かの学生がいるようだ。

自動ドアを通り館内へ足を踏み入れる。目の前には受付があり、そこにいる女性に声をかけられた。

「こんにちは。本日はどういったご用件でしょうか？」

「えっと……今日は端末を使わせてもらいたいんですが」

「はい、学生証をお願いします」

言われた通り財布の中からカードを取り出して差し出す。それを受け取った女性はパソコンにカードを挿入した。

「確認が取れました。ではこちらにお進みください」

カウンターの横にある通路を指差される。そこを通っていくといくつもの扉が並んでいる場所にたどり着いた。

「そちらの一番奥の部屋をお使い下さい」

「わかりました」

示された部屋に入るとそこは机と椅子だけが置かれた10畳ほどの簡素なものだった。だがそれがかえって集中できる環境になっている。私は早速自分のIDカードを差し込んで端末を操作し始めた。

「うげ…」

端末のニュース欄に見に覚えがある人物を見つけると、思わず声が出てしまった。

『時田夫婦またもや技術で圧倒！』『時田夫妻、またもや技術で犯罪組織壊滅』『時田夫妻、今度は技術による事故解決』『時田夫妻、技術により交通事故被害者を救う』

etc…… 画面には次々と両親に関する記事が表示される。

『時田 守』『時田 空』……これが両親の名前だ。2人は世間では有名な人であり、『その技術に負けなし！』とも言われているほどの実力者である。そんな2人の子供として生まれた私は、小さい頃から両親の技術を間近で見続けてきた。おかげで今では『技術』に関してそれなりの知識を持っていると思う。

そして私はこの『技術高校』を志望した。理由は簡単、父さんや母さんの母校だからだ。2人のような技術者になりたいと思っている。(まあそれだけではないけど……さて、そろそろ始めるか)

端末に表示されている画面を切りかえ、検索項目を入力する。キー

ワードは『時空』……と。

『時空』という単語を打ち込むだけで何百ページものデータが出てきた。その中から適当に目についた物を開いてみる。そこにはあることについて書かれていた。

『西暦2402年、日本は第4次世界大戦の影響で国力が低下していた。そのためアメリカや中国などの大国が日本に圧力を加え始めていた。そんな中、突如として現れたのが『時空転移システム』である。そのシステムを使用し、日本は第4次世界大戦を乗り切った。だが、システムの詳細は分からず、現代でも……』

「うーん……オカルトっぽいなあ……確かに時空関係ではあるけども。これじゃ入学まで間に合わないよ……」

何故わざわざ電子図書館まで行ってこんなことまでしているのか。それは両親と私の『技術』について話さなければならぬ。

両親の……まずは母親の時田 空は『空間万能技術』。空間転移はもちろんのこと、名前の通り空間に関することなら万能の如く扱える技術。

次に父親の時田 守は『時間停止技術』。詳しいことは分からないが、時間が止められるという、世界でも類を見ない技術。

そして私、時田 輪は『硬化技術』……と言われている。といっても、他の類似している技術者みたいに、ある部分だけ硬化や任意で硬化することは出来ない。私の場合は『無意識に全身を硬化』しているようで、不意打ちに対応は出来るが硬化強度が低い。そのため、貫通力の高い銃弾や、腕力が強い者の攻撃は通ってしまう。せいぜい、『お前硬くね?』くらいである。

両親の能力は遺伝しやすいとは言われているものの、これは遺伝の問題なのかは不明らしい。少なくとも、親戚に『硬化技術』という者は居ない……

そこで、少しでも手がかりになればと思い『時空』関係の記事を片っ端から読み漁っているわけだ。

(でもやっぱり難しいな……もう少しレベルを上げて調べようかな……)

端末を操作しようとしたその時だった。突然持っていた携帯が鳴り響いた。驚いてビクツとしてしまう。誰だよ全くもう……

携帯を見ると、そこには『着信・母さん』の文字が表示されていた。「もしもし？母さん？どうしたの」

「輪!?!:ああ良かった。」

「え？」何が良かったんだらう。

「今どこ？」

「えつと、今は電子図書館にいるけど」

「そうなの!?!今すぐそこを離れなさい！」

「え？」どういう事だろう。

(つて、電話切られてるし……)

携帯から音声は聞こえず、確認するとホーム画面になっていた。

(とにかく外に出て離れないと)

訳も分からないが部屋の外に出ようとする。すると出入口の自動ドアが開いて男が入って来る。

(なつ……!?!:な……:この男?)

一目見た瞬間に感じた。『危険』だと。

もう4月に入り暖かくなつたのにも関わらず、厚手の黒いコートと手袋をしている。顔は深く被ったフードのせいによく見えない。

男は部屋に入るなり真っ直ぐこちらに向かってきた。思わず後ずさる。

(なんなんだ一体……!!)

これが私の最初の戦闘であり、『秘密』への入り口

……いや、既に入っていたのかもしれない。

第2話：初戦闘！

「……………」

電子図書館の個室で調べものをしていたところを、謎の男によって中断された。

個室とはいっても鍵は掛けられない。広さは10畳程で、端末と机と椅子しかない質素なつくりとなっている。天井にはエアコン、壁は強化ガラスで区切られており、ちよつとの爆発では壊れない。ガラスであるため、内外からの景色は丸見えとなる。

丸見えのはずなのに…

(外の景色がまるで分からない…)

いつもは見えるはずの景色が、曇っているように見えなくなっているのだ。すなわち…

(何かの『技術者』なのは確定…)

その男はコートを着ているのだが、全身真っ黒なのだ。深く帽子もかぶっており、髪も瞳の色すらも確認できない。唯一確認できる口元は笑みを浮かべているようだ。

そして、この男の最大の特徴は…

(白い息…？ということは…氷系か？)

そう。この男と私がいる部屋は全く寒くなかったにもかかわらず、吐いている息だけが白くなっていたのだ。そして、その男を中心として着々と肌寒くなっていくのを感じた。それはつまり…

(低温度変化…技術者)

ここ数年、電子図書館を利用して何も知ってない訳がない。ある程度は勉強して技術者の特徴は知っている。なにも『時空』だけ調べてるだけじゃなく、炎系や氷系、異能系についても調べ済みだ。

…といっても、実戦は初めてなんだけれど

「……………何用ですか？」

「……………」

男は喋らない。その口は飾りかのように笑みを浮かべているだけである。心臓は速く鼓動し、脈も早くなる。臨戦態勢を取るもこれは初の実戦であり、緊張感が強くなる。

だが、さっきの発言で明らかに雰囲気が変わった。さっきまではどこか猶予があるような感じだったのだが、今はそんな様子は一切見られない。男が左腕を突き出す。

私は身構え、いつ攻撃されてもいいように。しかし……

「ッ!?!」

突然の衝撃に思わず声が出てしまう。私は何もしていない。それどころか、男も私も動いてすらいない。にも関わらず私の体は壁に叩きつけられていたのだ。一瞬呼吸困難になるもすぐに持ち直し、男を見据える。

「……………」

相変わらず男は黙ったままである。

ふと、地面を見ると数個の氷の塊が転がっているのに気が付いた。

(氷の弾丸…ね…ショットガンのように飛ばしてきたって訳か…)

普通の体の耐久性じゃ穴が空いていただろうが、こっちは硬化技術者。しかも常時無意識に発動可能。氷の威力はこちらの体を吹き飛ばす程。

ただ、

(こっちの攻撃手段が…使えそうなのはこの丸椅子)

丸椅子を掴み、改めて構える。すると男はゆっくりと右腕を上げ、腕を振り下ろした。

今度は先程の氷弾ではなく、大きな氷柱が5本ほど向かってくる。

「っ!」

避けれないと判断し、防御する。

一本目は丸椅子で防ぎ、

二本目は床に転がりながら回避、

三本目は丸椅子で受け流し、

四本目は何とか飛んで回避に成功する。

五本目は空気を多く含んでいるのか氷柱は砕けている。

(我ながら上手くできたけど……これじゃあ近付けな……ツツツ!)
すると男は再び腕を下ろし、体に覚えがある衝撃が走り、そのまま壁に激突する。さっきのショットガンのような氷弾だと判断する。

「ツ女の子に容赦ないね……」

「……………」

男は答えない。無言のまま再び手を下ろす。今度は数十本の氷の柱が出現し、次々と発射される。

「ぐっ!!」

一発目を丸椅子で防いだ後にすぐ二発目が飛んできたため、反応が遅れてしまい、もろに喰らってしまふ。

ただでさえこの狭さ。何本も撃たれると避けるのが難しくなってくる。普通の体よりも硬いとはいえ、このままくらい続ければ確実に動けなくなってしまう。

逃げるのも考えたが、逃げるためにはあの男の後ろに行かなければならない。そしてこのまま気温が下がれば、ますます不利になっってしまう。

(何か、何か弱点があれば……)

炎もなく、お湯もなく……男も動かない。熱に弱いのは知っているが、暖かいだけでは効かないはず……身近にそんな熱いものなんて……

(ん……動かない……水滴か……あっ……)

あるじゃないか。ここに……しかも熱い必要は無いんだ。

私は覚悟を決め、立ち上がる。そして男に向かっていく。男は無表情でまた手を下す。

無数の氷柱が飛んできてくる。だが、その全てをかわすのではなく、全てを受け止める。氷が砕け散っていく。

「ああああ!!!」

「……………」

「ツ!!……はあっ……はあっ……どうだ……もう終わり……?」

「……………」

男は首を傾げ、左腕を突き出す。ダメージは負ったが致命傷ではない。まだまだ戦える。それに…

「見切ってるよッ！」
「……………」

近付けさせないために、近距離で氷弾を撃つのは分かった。それに、ある特徴についても。

先ほどから右腕と左腕を上げるか突き出し、そこから攻撃している。そして、右腕は氷柱、左腕は氷弾という法則。

ただこれだけでは決定打に欠ける。だからこそ…

（『これ』がある！）

私は鞆からあるものを取り出し、蓋を開けてその液体を男に振りかける。

「!!!」

防御体勢を取っているようだが、たちまちその男は割れて、『溶け』始める。

そう：最初からその部屋に技術者は居なかったのだ。

おかしいと思った事がある。何故部屋で追い詰めることなく、その場を動かなかったのか。いや、動けなかったのだ。

部屋の天井にはエアコンがついており、暖房になっていた。下手に動く、『ただの氷像人形』だとバレてしまうから。

そして、『空気を多く含んだ氷』『エアコンで溶けた氷柱の水滴』それは溶けやすく、砕けやすいということ。熱い必要はなく、暖かいもので十分。

（ありがとう…お母さん、この『魔法瓶』のおかげで切り抜けた。）

かけた液体は暖かいお茶。氷像の遠隔操作だった為か、空気が入るほど氷の密度が甘かった。攻撃も氷像人形も…

（…外に出ようとして、）

急ぐように部屋を出て周りを見る。部屋の中の異変に気が付いて人達が集まっている。

（良かった…）

そう思うのを最後に、私は意識を手放した。

第3話：初戦闘後！

『…ハア、みつともな』

「…何が…あれ…？」

白い天井が見えるのとベッドに寝かされている事で、ここが病院だという事が分かった。あの氷男との初戦闘後、気を手放した自分が病院に運ばれたんだろう。

先ほど声が聞こえた気がするが、周りに誰も居ない。それもそのはず、そもそもこの部屋は個室であり、他の患者は居ないし、ベッドも自分が寝ている一つだけである。

(とにかく、ナースコールを…)

看護師さんと呼ぶために、ナースコールを押そうとしたところ、個室のドアが開いた。

(っ…母さんか…)

ドアには泣きそうな、嬉しそうな複雑な顔で入ってくる母親が居た。ドアが開いた瞬間、あの氷男が入って来たと思いい、身構えたが杞憂に終わった。

「輪ちやあああん！ごめんなさああい…」

「うわあ!?急に技術で転移しなくても…」

余程心配だったのか、空間技術で近付いて抱きしめてくる。

(く、苦しい…あ…でも柔らあ……じゃなくて！)

「母さん！全部説明してもらおうから。」

「…うん。分かったわ…」

そして母さんは事の顛末を話す。

「昔、私と守さんがコンビ組んでいて、たくさん事件解決してきたのは知ってるでしょ？」

「知ってるけど…昔というか今もそうなんじゃ…」

「あら、恥ずか…こほん。ま、まあその影響で逆恨みも多い訳よ。」

「つまり、昔の事件の逆恨みで、娘である私を狙ってきたって事ね…」

「そうなのよ！私たちのせいで…ごめんなさい…」

「いいよ！そんなの母さん達が悪い訳ではないし…」

親の逆恨みで娘が狙われるというのはあるが、体験したのは初めてだった。何故この時期に襲って来たか分からない。もつと私が幼いころに来れば、反撃される心配もないはず。

…覚えていないだけかもしれないが。

「輪ちやんが小さい頃も同じような事あったけど、それはあらかじめ予防できたのよ。」

ただ…」

「ただ…？」

「昔捕まえていた犯罪者が、今ちようど刑期を終える頃なの…」

●技術を悪用した犯罪、『技術犯罪』について。

技術による犯罪は、年々と増えていった。力の秩序によって、警察も動きづらくなり反撃され、それにより法の秩序が乱れていったのだ。政府も警察も信用を失いかけていた。

そこで対策の一つとして決定したのが、『技術犯罪及びその刑期について』

簡単に説明すると『技術を使って犯罪を犯すと罪が重くなりますよ』というもの。

他にも対策は挙げられたが、実際に技術による犯罪を減らしたとも呼ばれている。

「なるほどね…」

あつ…ということは、これからどんどん母さん達が捕まえてきた逆恨み技術犯罪者が来る確率が高い…」

「そうなるわね…本当にごめんなさい…」

「いやいや！いいって！」

(そうなる私と私の高校生活がままならないんじゃ…)

下手すると、学校に乗り込んだり、他の生徒を巻き込む可能性がある。そんな爆弾みたいなもの、学校は抱え込みたくないはずだ。

「そして…これが本題ね…輪には、ツライかもしれない…」

「な、なに…？」

急にしんみりとなり、そのあとに続く言葉を待つ。

「私達と輪ちゃんの名刺、住所別にしようって決まったの…」

「……」

(まあ、そうじゃなかったら危険だから仕方ない所もあるけど…でも…)

学校や周りの人を巻き込みたくない気持ち、自分が技術者として未熟なのは分かるが、何より家族を否定されたかのように、心に突き刺さったのを感じた。

過去に両親が捕まえたということは、両親レベルの技術者じゃないと太刀打ちできないということ。

(やっぱり…)

自分自身の未熟さと技術に悔しさを感じていたが、その時、抱きしめられるような感覚。

「かあ…やい」

「でも、これだけは言わせて…」

私達の自慢の娘よ。愛してる…」

頭の中でその言葉を整理した時、はつきりと心に決めた事がある。それは

(絶対に守り抜けるような最強の技術者に！)

「あああやだやだ…しんみりするのは終わりにしましょ！」

相変わらず切り替えが早い母親に、笑顔が出てくる。

「そうだ！輪ちゃん、あの氷人形どうやって乗り切ったの？私苦戦して守さんが居なければ結構危なかったのに。」

「そ、そうなんだ…それはね…」

戦闘について話すと母親は驚いたように

「ま、魔法瓶とエアコンで…？うっそん…恐ろしい子！」

「ははは…」(褒められた…)

「そういえば、氷男どうなったの？」

「きちつとお灸添えて突き出したわよ。ふふ…久しぶりに会ったけど変わってなかったわねえ…」

(こ、怖あ…)

その後、退院したら一緒にお風呂に入ろうと言われて、また一悶着あるのだが、それは別の話…



「髪型ヨシッ！制服と鞄ヨシッ！」

現場よろしく、身だしなみを鏡でチェックする女子高生。新しい部屋、新しい町で過ごすことになった『時田 輪』改め、『姿目 リン』、今日から技術高校生だ。

(あれから4月になったけど…本当に大丈夫かな)

今、学校の駅の隣駅に住んでいる。名前と名字については市役所や警察、学校などに理由を話し、了承を得ている。その情報はトップシークレット扱いとなり、知っている者は片手で数える程だ。

そして、こんなスムーズに事が済んだのは、両親のおかげである。技術者としていろんな所、というか重鎮のコネクションを持っている両親。申し訳ないが、それに甘えた形になる。

「あつ、もうこんな時間…入学式遅れたらシャレになんないもんね…」
外に出る準備を行い、ドアを開ける。ここから『境介駅』まで徒歩5分、電車は10分程で『技術高校前』まで着く。

やはり、学校に行く生徒が多いのか、同じ制服がほとんどである。携帯をいじっている者や音楽を聴いてる者、はたまた外を見て感動している者まで居る。

(ん?感動して…?)

特徴的過ぎて注目を浴びている女子技術高校生。先輩らしき人が驚いて見ているため、同じ新入生だと考える。

(田舎の方から来たのかな…珍しい)

今時、未開の地はなく田舎も見られなくなった。との記事は読んだが、実際に見たのは初めてかもしれない。

『まもなく、技術高校前へ技術高校前へお出口は左側です。』

(これからどんな事を学ぶんだろうか、まあ行けば分かるさ!)

電車が止まり、ドアが開く。輪…いやリンは目標に向かって一歩外に出る。それは目標だけなのか…それとも

一歩一歩と『秘密』に近付いている。